

「藝術と教養-藝術は教養たりえるのか？」シンポジウム

「イギリス批評の父」と呼ばれるジョン・ドライデンは、イギリスにおける本格的な演劇論の嚆矢となる『劇詩論』(1667)を著し、古代作家と現代作家、英仏演劇の比較、エリザベス朝演劇と王政復古期演劇の比較、演劇における規則の是非、劇の文体の優劣など、その当時の演劇界の重要トピックスを、四人の人物の対話形式で論じました。議論が白熱する中で、四人のうちの一人、リジディアスが、“劇がどのようなものであるべきかを知らなければ、誰が最高の劇を書いたかを論じるのは不可能だろう”と発言します。リジディアスがそう言うや否や、他の三人は、“それでは演劇の定義を教えてください”と彼に懇願します。そこでリジディアスは、演劇とは「人間性の正確で生き生きとしたイメージであり、人間のパッションとヒューモア、人間の従属する運命の変転を描いて、人間を楽しませながら教え導くもの (for the delight and instruction of mankind)」と述べます。

ドライデンに限らず、また演劇に限らず、藝術の目的が“楽しませるものでありつつ人間性を高めるもの”とする言説は、古今東西に繰り返されてきた藝術理念の一つであることは言うまでもありません。その根底にあるのは、藝術は心地よいものでありながら豊かな人間性を涵養するために役に立つもの、言い換えれば、藝術は娯楽であると同時に「教養」であるべきだという確信です。そして、藝術は、人間性を養うものという意味での「教養」として、人々にとってなくてはならないものということになります。

しかし現代のグローバリゼーションが進行する世界を見渡すと、国や地域によって求められる教養も様々であり、全世界に遍く共有できるような教養を考えるのが困難になっています。今日では、教養そのものの定義やあり方を根本的に議論しなおすべきに来ているのではないのでしょうか。現代求められている教養とはどのようなものか？ そもそも藝術は教養となりうるのか？ 藝術が教養の一部になるとすれば、教養としての藝術とはどのようなものを言うのか？ また藝術的教養は人間にとって本当に必要なのか？ かつて全財産を奪われ監禁された南アフリカの政治犯は、音楽、美術、演劇、文学などの教養 (Humanities) が、人間にとって不可欠なものであり、「食べ物よりも重要だったことを確信した」と発言した (デイヴィッド・シャルクウィック による IFTR 国際演劇学会での基調講演、ウォリック大学、2014年) ことを考えても、教養は必要であることは言うまでもありませんが、そのあり方や見方については今一度再考が求められているのだと思います。

これは大きな問題ですが、藝術研究を進める私たちにとってのみならず、広く一般社会の関心も惹くことでしょう。今回はこの問題について藝術の多領域から総合的に考え、藝術の存在意義を「教養」という文脈において考えたいと思います。